

コラム12 「復興節」ところの復興

震災の前年からその夏にかけて、自分を“河原の枯れ芒”に喩える「船頭小唄」が大流行した。中山晋平作の洋音階によるもの悲しい曲調とニヒルな野口雨情作の歌詞は、急遽つくられた映画や演歌師によって、折からの不況下の人々の心にたちまち共鳴し、全国津々浦々に広がった。明治期に東京論「一国の首都」「水の都」を著した幸田露伴が、新聞上で“このように「卑弱哀傷、厭悪」な歌が江東には多く唱われ・・・回顧するといやな感じがする”と表した（大阪毎日新聞10月9日号）。今では歌がはやったので震災が来たと言ったと伝わっている。

さて、帝都復興計画の先が見えない1923（大正12）年10月初め、夕闇迫る日暮里の細民街の路上に、相棒を連れた一人の若い演歌師が立ち、バイオリンの音色にのせて震災の惨状を唄いだした。

♪時それ大正十二年 九月一日正午時 突然起る大地震 神の怒りか竜神の 何に恐るる戦きか
大地ゆるぎて家毀ち 瓦の崩れ落つる音 電柱裂けて物凄く 潰れし家のその中に
呻きの声や叫ぶ声 文化の都一瞬に 修羅の巷と化しにけり 火の手は起るここかしこ
狂へる風に煽られて 乱るる焰火の柱 天に沖する黒煙り 老若男女分ちなく右往左往に逃げまどう
（中略）蕭条そそぐ秋の雨 そぞろ哀れを身にしめて、上野の山にきて見れば 大東京の影もなく
見渡す限り焼け野原、変わり果てたる様なるよ 感慨胸に迫り来て 噫と一言洩らすのみ
（「大震災の唄」作：添田さつき・曲：鳥居春陽、添田知道「演歌の明治大正史」）

添田さつき（本名：知道）当時21才、演歌師添田唾蟬坊の一人息子である。震災で下谷山伏町いろは長屋で倒壊に遭い、日暮里に落ち着いた。焼けトタンの小屋やバラックが焼け跡に建ち始めた頃、本所で被災した演歌師の依頼があり、8頁ほどの唄本を作り焼け残った印刷所を探して印刷した。時勢に素早い演歌師達はそれを抱えて地方へ飛んだ。彼も糊口を凌ぐため、近くの町にでかけた。彼はその状況を残している。

「どこもかしこも薄暗くて、どの家もどの家もひそみかえっていた。そんな中で唄声をあげたら袋叩きにでもあうのではないか・・・」“おそるおそる、まったくおそるおそる、オリンを弾き出したい出してみた。狭い横町である。あちこちから忽ち人がとびだして囲まれた。けれど怒られるのでなかった。みんなしいんとして聴いてくれるのだった。被害の状況を語り綴った報道歌をうたい終わったら、それ（唄本）をくれ、くれとみな手をのばして寄ってきた。売れた、売れた。／ほっとした。そこで「復興節」の方をうたってみた。これは軽快調である。するとさわやかな笑いが起こってきたではないか。これでまったく安心した。」（「演歌師の生活」雄山閣 昭和42年）。

その後、歌詞が追作された。

♪ウチは焼けても 江戸っ子の 意気は消えない 見ておくれ アラマ オヤマ
忽ち並んだバラックに 夜は寝ながら お月さま眺めて エーズエーズ／帝都復興 エーズエーズ
♪嬢（かかあ）が亭主に言うようは お前さんしっかりしておくれ アラマ オヤマ
「今川焼」さえ「復興焼」と 改名してるじゃないか お前さんもしっかりして エーズ エーズ
亭主復興 エーズ エーズ

♪学校へ行くにも お供を連れた お嬢さんが 茹小豆(ゆであずき)を開業し アラマ オヤマ
恥づかしそうに 差し出せば お客が恐縮して お辞儀をして受け取る エーゾ エーゾ
帝都復興 エーゾ エーゾ

♪ツンとすまして 居た事も 夢と消えたる 奥様が アラマ オヤマ
顔の色さえ 真っ黒で 配給米が欲しさに 押したり押されたり エーゾ エーゾ
その意気 その意気 エーゾ エーゾ

♪(追作から) 四分板叩いて もうしもうし ちよいと隣の おかみさん アラマ オヤマ
今日は何々 もらってきたの 玄米二合に 缶詰ひとつで エーゾ エーゾ
台所復興 エーゾ エーゾ

♪銀座街頭 泥の海 種を蒔こうというたも夢よ アラマ オヤマ
帝都復興善後策 道もよくなる 街もよくなる 電車も安くなる エーゾ エーゾ
新平さんに頼めば エーゾ エーゾ

(「復興節」、記録現代史「日本の百年⑥震災に揺らぐ」「東京百年史第4巻」他)

演歌師や何社ものレコードによってこの復興節は被災地各所に流れ、全国にも広まった。国産レコード大手の日本蓄音器商会は、横浜本社が全焼、川崎工場は倒壊していた。東京で復興が始まると、レコード需要が沸き起こった。11月に川崎工場が再開、12月半ば新譜の発売があった。レコード店頭から街頭に明るいメロディが久しぶりに銀座に流れ、その中に二三吉が唄う愉快的「復興節」があった。年が明けて他社も競作し、復興期の庶民の気持ちを元気づけた。父唾蟬坊も、「大正大震災の唄」や帝都復興を皮肉った「コノサイソング」を作っている。

一方、クラシック系の音楽家による日本音楽連盟は「帝都復興協会」を組織し、連日慰安活動を行った。会員二氏の作詞作曲で「帝都復興の歌」が完成、10月29日に楽譜になって出版された。こちらは、教員を通じて小学校で教えられ児童などに歌われた。

♪一、陽は照る瑠璃の空の下 悪魔の群れは影もなし 若き光にさすところ 大地も人もよみがえる
二、今、新しき土の上 ころを堅く結びつつ 若き生命の輝きに 真理を目指して進みゆく
三、今、音を合わせ槌は鳴る 最後の勝利望みつつ 強き力の寄るところ 不滅を誇る家を建てん
四、陽は照る瑠璃の空の下 怪しく暗き影はなし 清きわが世のあるかぎり 世界に誇る街を建てん
(「帝都復興の歌」詞：小林愛雄・曲：小松耕輔、「アサヒグラフ」大正11年11月14日号)

音楽が、災害の死者を悼み被災者を癒し元気づけた事例は多い。1995年阪神・淡路大震災でもボランティアや復興基金の手でライブイベントが数多く実施された。ここでは、チンドン楽器と「復興節」を携えて被災地に向かった東京のロックバンド「ソウルフラワーユニオン」と、彼らの曲「満月の夕」をカバーした被災地神戸出身の青春ロックバンド「ガガガSP」の活動及び神戸市の小学校教師白井真が作詞作曲し、ミュージカルや合唱曲となって小中学校に広まった楽曲「しあわせ運べるように」を、災害体験を伝承する事例として特筆しておきたい。

なお、震災前1919(大正8)年16歳の添田知道は、丸の内などを歌った「東京節」(パイノパイノパイ)を流行させた。これを復興期の「東京行進曲」(1929(昭和4)年、詞西條八十・曲中山晋平)と比べると、曲調・場所の違いは興味深いものがある。さらに、被災者を元気づけた演歌師という職業がラジオ開始により終焉を迎えたことも歴史の皮肉として留めておきたい。